

風景・多足族

山田正好

見捨てられたモノが、語りかける時がある。このモノが素材となり、私の体の中で棲息しているヒトと出会い、私の彫刻は生まれる。ある時は、逆にこのヒトがモノに語りかける時がある。私は、その両者の道案内人なのかもしれない。

今、私の腕時計の秒針は、文字盤の上を確かなリズムで、休むのを忘れたかのように、軽やかに歩み続けている。タッタタッ。自分の血液の流れを聞くようだ。私の手は、なめし皮のひもを機械的に、鉄棒に巻きつけていく。グルグル、ぐるぐる。やがて、この心棒は、自分の肌を獲得して人となり、ひとり歩み出す。これらの彫刻は、道案内人と一緒に旅に出る。そして、オアシスで我が身の肌を少し巻き戻すことで、多足族は、旅の疲れが癒されることを学ぶ。それからまた、約束の時がやってきたかのごとく、彼らの旅路が続く。タッタタッ。私の秒針と多足族の歩調が重なり、彼らは私の視野から遠ざかっていく。

いつか、この先導者のいない風景の中で、多足族だけが遊ぶ時代が訪れるのだろうか.....。

2007年 晩春